

いじめられている君へ

朝日新聞が7月14日から8月17日までの1ヶ月間にわたり、いじめをテーマに、各界の著名人34人が子ども達に語りかけるという連載を行いました。

テーマは

「いじめられている君へ」

「いじめている君へ」

「いじめを見ている君へ」

という3つに分かれています。

この内、最も多くのメッセージが寄せられているのは「いじめられている君へ」のものです。

今回メッセージを寄せた34人の方々の多くは、子どもの頃いじめを受けていた経験の持ち主であり、それだけに、彼らが語る言葉には、単なる激励とは異なる重たいものが伝わってきます。

幾人かのメッセージを紹介しましょう。

・ボクシング元世界王者の内藤大介さん

ボクシングを始めてその楽しさにのめり込み、いつの間にかいじめの事なんかどうでもよくなっていた。

少しでも嫌な事があれば自分だけで抱え込むな。誰でも、先生でも相談したらいい。それはカッコ悪い事じゃない。あきらめちゃいけないんだ。

・タレントの中川翔子さん

いじめに対しては、立ち向かう意味すらないから、まず自分の事を大事に考えて逃げるべきだ。

また、もし自分が死んでも、ダメージを受けるのはいじめてきた子たちじゃなくて、自分の家族だけなんだ。意味のないことはやめようと思った。

・作家の乙武洋匡さん

人生が輝き出す日は必ず来る。生きよう。学校を休んだって転校したっていい。

君が受けているいじめをノートに書いてみるんだ。問題がこじれたときには、君を守ってくれる証拠にもなる。そして何より、その記録の厚みは、君

が耐えに耐えてきた強さの証になる。

・「生協の白石さん」の著者白石昌則さん

いじめの悩みを誰かに打ち明けてみては。いじめられることは恥かしいことじゃありませんよ。

人間は他人の生死に関し、呆れる程、無力で無関心なものです。本人にとっては深刻な問題なのに、なんだか悔しいじゃないですか。生き続けて、見返しましょう！

他の方々のメッセージもご紹介したいのですが、紙面の都合もありこの程度に留めておきます。なお、朝日新聞では、今回掲載されなかった分も含めて連載をまとめた本を出版するそうですので、詳しくはそちらをご一読いただければと思います。

「いじめられている君へ」宛てたメッセージを詠みながら、そこには

- ・ いじめを受けている事は恥かしい事ではないので、一人で抱え込まずに誰かに相談してほしい。
- ・ 自殺はするな。家族が悲しむだけだ。
- ・ 夢中になれるもの、打ち込めるものを見つけて

といった共通点があるように感じます。

時には抵抗してみても、とか、まずは逃げるべきだという意見もありますが、どういう方法であれ、自分を大切にしたいという事に尽きるでしょう。

乙武さんがいうように、受けているいじめをノートに書くというのも重要かも知れませんが、でも、記録の厚みがいじめに耐えた強さの証というのは悲し過ぎます。

どんな時代にも、どんな場所にもいじめというものが起こり得るものである以上、一人の力ではなく、沢山の力でいじめの芽を摘む努力をしなければなりません。子ども達に逃げろという前に、大人達が、子ども達の命を守る絶対安心の砦でなくてはなりません。

そしてもう一つ、私は今回の連載を読みながら、今いじめをしている子ども達にこのメッセージは届くだろうかと考えました。届いて欲しいとは願っていますが、多分届かないだろうとも思っています。何故なら、いじめをしている子ども達には、その自覚がないか、自覚はあっても罪悪感殆どないと考えられるからです。

いじめをしている子ども達にも、いじめは犯罪であり、恥かしい事だという事をしっかりと認識させ、いじめという蟻地獄から救い出してやることもまた、大人達一人ひとりの大きな責任だと思います。(塾頭 吉田 洋一)